

現代イタリア語における WH 要素の 統語移動について

石 岡 精 三*

On the Syntactic Movement of WH Elements
in Italian

Seizo ISHIOKA

0. はじめに

本稿は、イタリア語における WH 要素の S 移動を考察する。Rizzi (1982) 以来、境界節点 (Bounding Node) はパラメータ化されると考えられている。英語では NP と IP (=S), イタリア語では NP と CP (=S') が境界節点を構成するとされる。明らかに、このパラメータ設定は説明的というよりはむしろ記述的な性格を呈するものである。Chomsky (1986b) は、現象的には境界節点によって把握可能とされる言語事象をより深いレベルで説明しようとした。統率と移動に関する事象を、同一の「障壁」(barrier, bar. と略記) なる概念を運用することによって説明しようとした。つまり、境界節点の因数分解が試みられた。しかしながら、この Chomsky (1986b) の理論では、イタリア語における境界節点の因数分解は不可能である。¹⁾

Rizzi (1982) 自身も指摘するように、関係詞 WH 要素が疑問詞 WH 要素を越える場合の S 移動は、上述のパラメータ化された境界節点 (NP, CP) で説明可能である ((1a-b)). しかし、疑問詞 WH 要素が同じ疑問詞 WH 要素を越える S 移動の場合には問題を惹起する (1c-e). 以下の例を検討してみよう (斜字体下線部分の動詞は接続法形態を示す).

- (1) a. il solo incarico che_i non sapevi [_{CP}[a chi]_j avrebbero affidato
t_i t_j] è poi finito proprio a te.

原稿受付: 平成3年5月24日

*長岡技術科学大学語学センター

'the only task that you didn't know to whom they would
entrust has been entrusted exactly to you'

[Rizzi (1982) 6a]

- b. *questo incarico, che_i non so proprio [_{CP} chi_j t_j possa avere
indovinato [_{CP} [$a\ chi_i$]_k affiderò t_j t_k]],...

'this task, that I really don't know who might have guessed
to whom I will entrust,...

[Rizzi (1982) 13b]

- c. * chi_i ti domandi [_{CP} chi_j t_j ha incontrato t_i] ?

'who do you wonder who met'

[Rizzi (1982) 7a]

- d. [$a\ quale\ dei\ tuoi\ figli$]_i non ti ricordi [_{CP} [$quanti\ soldi$]_j hai
dato t_j t_i] ?

'to which of your sons don't you remember how much
money you gave'

[Rizzi (1982) 註5]

- e. chi_i ti chiedi [_{CP} [$che\ cosa$]_j t_i abbia dipinto t_j] ?

'who do you wonder what painted' [Manzini (1988) 34b]

(1a)において長距離移動する che_i は、単一の境界節点 (CP) を越える。
一方、(1b)では、長距離移動する che_i が複数の境界節点を越える。結果として、(1a-b)の相違は Subjacency によって説明される。(1c-e)では、長距離移動する要素 (chi_i , [$a\ quale\ dei\ tuoi\ figli$]_i, chi_i) が越える境界節点は単一の CP である。(1a-b)の相違を説明する論法は、(1c-e)をすべて文法的と予測することになる (Rizzi (1982)によれば、 t_i , t_j は共に ECP を満足する)。

本稿は Manzini (1988) の提唱する理論を一部修正し、上の (1c-e) で観察される相違と (1a-b) で観察される事象を同時に説明する理論の構築を目標とする。第1部では、Manzini (1988)の概要が示される。また、第2部では、その理論の問題点が指摘され、第3部では、その問題点を克服すると考えられる代替理論が提案される。第4部は結語を構成する。

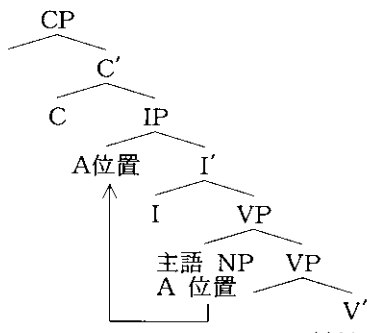
1. Manzini (1988) の概要

Tiedeman (1989) と異なり、Cinque (1990) と Manzini (1988) では、統率に対する bar. と移動(Subjacency)に対する bar. が、それぞれ別個に定義される。

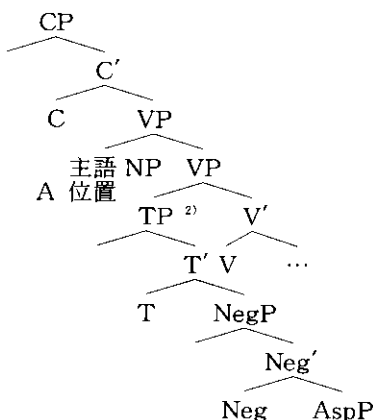
Manzini (1988) は、文の主語が VP に付加された位置で基底生成されると

考える(小節の主語も同様)。また、イタリア語と英語に対して、異なる文構造を想定する。

(2a) 英語の CP 構造



(2b) イタリア語の CP 構造



(2b) において、自由文倒置もまた D 構造で基底生成される。また、通常の X' 理論と異なり、D 構造において、XP 範疇の付加構造を前提している。具体的には、(3) のような X' 理論が想定される。

$$\begin{aligned}
 (3) \quad & \text{XP} \rightarrow \begin{cases} \text{XP}^* \text{X}' (\text{XP}^*) \\ \text{XP}^* \text{XP} (\text{XP}^*) \end{cases} \\
 & \text{X}' \rightarrow (\text{XP}^*) \text{X}'' \text{XP}^*
 \end{aligned}$$

次に、Manzini (1988) で前提される概念の定義体系を列挙する。

(4) β L-marks α iff

β is an X^0 , β is lexical and

(i) β θ -marks α ; or

(ii) β θ -marks γ and α agrees with γ .³⁾

(5) γ is a subjacency barrier for α iff

- γ is a maximal projection, γ dominates α and γ is not L-marked.
- (6) α is subjacent to β iff (α : trace β : antecedent)
if γ is a subjacency barrier (s-bar.) for β , γ does not exclude β .
- (7) If α is a trace and β is the immediate antecedent of α in a chain, α is subjacent to β .
- (8) β g-marks α iff
 β is an X^0 and
(i) β θ -marks α ; or
(ii) β θ -marks γ and α agrees with γ .
- (9) γ is a government barrier (g-bar.) for α iff
 γ is a maximal projection, γ dominates α and
(i) γ dominates the g-marker of α ; or
(ii) α is not g-marked.
- (10) β governs α iff
if γ is a government barrier for α , γ does not exclude β .
- (11) ECP⁴⁾
If α is a trace and β is the immediate antecedent of α in a chain,
(i) the foot of the chain is θ -governed ; or
(ii) β governs α .
- (12) β θ -governs α iff
 β is a lexical X^0 and β^n θ -marks α .⁵⁾

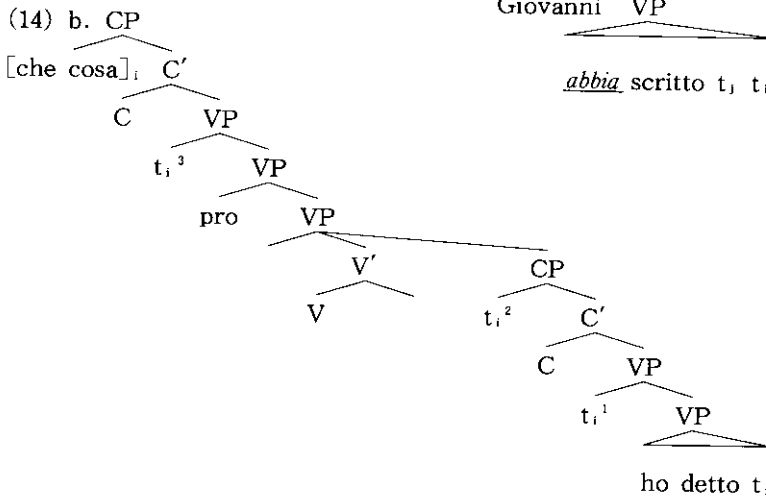
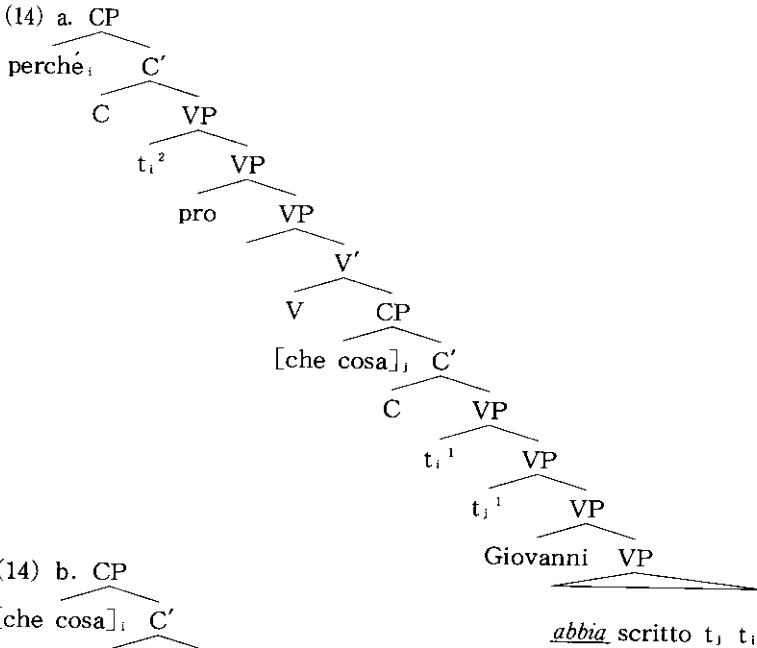
上の定義体系の適用例として、WH 島内部からの WH 要素の摘出移動 (13 a), 付加語の島内部からのそれ (13b) と文主語内部からのそれ (13c) について考える。

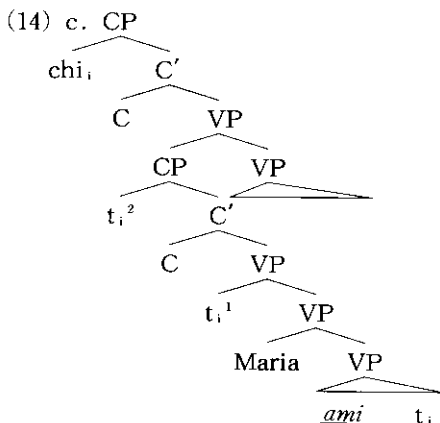
- (13) a. *perché_i ti chiedi [_{CP} [che cosa]_j Giovanni abbia scritto t_j t_i] ?
'why do you wonder what John wrote'
[Manzini (1988) 31b]
- b. *[che cosa]_i sei infuriato [_{CP} perché ho detto t_i] ?
'what are you furious because I said'
[Manzini (1988) 17b]

- c. **chi_i che Maria ami t_i è impossibile?*
 'who is that Mary likes impossible'

[Manzini (1988) 15b]

(13a-c) の移動経路は以下のようになる。





(14a) の $[che\ cosa]_i$ の原初痕跡 (t_i) は、V (*abbia scritto*) によって θ 統率される (ECP を満足する)。また、当該要素が VP への付加を経て最終着地点に移動するため、s-bar. を越えることはない。perché_i の原初痕跡 (t_i) は、V (*abbia scritto*) によって θ 統率されない。⁶⁾ ECP を満足するためには、すべての移動部分連鎖において、痕跡がその直接上位の先行詞に統率される必要がある。部分連鎖 (t_i^1, t_i)、(*perché*_i, t_i^2) では、この統率要件が満たされる。部分連鎖 (t_i^2, t_i^1) では問題が起こる。embedded VP (embd. VP) に付加された位置にある t_i^1 は g 標示されない。定義(9-ii)により、embd. CP が g-bar. を形成する。よって、 t_i^2 は t_i^1 を統率しないことになる。つまり、部分連鎖 (t_i^2, t_i^1) は ECP に抵触する (すべての部分連鎖において Subjacency は満たされる)。結果として、(14a) は ECP に抵触し、非文と予測される。

(14b) では、原初痕跡 (t_i) が V (*ho detto*) によって θ 統率される (ECP を満足する)。部分連鎖 (t_i^3, t_i^2) の移動において、embd. CP が s-bar. を形成する。同様に、(14c) の部分連鎖 (*chi*_i, t_i^2) において、embd. CP が s-bar. を形成する。よって、(14b-c) は Subjacency に違反することにより、排除される。⁷⁾

2. Manzini (1988) の問題点

ここで、本稿の(1)について考える(便宜上、それぞれの移動経路を(15)として再掲する)。

- (15) a. *il solo incarico che_i non* [_{VP} *t_i*²[_{VP}[_{VP}*sapevi* [_{CP}[*a chi*]_j][_{VP}*t_i*¹ [_{VP}*t_j*¹[_{VP}[_{VP}*avrebbero affidato t_i t_j]]]]]]]] è poi finito proprio a te.*
- b. **questo incarico, che_i non* [_{VP} *t_i*³[_{VP}[_{VP}*so proprio* [_{CP}(₁) *chi_j* [_{VP}*t_i*²[_{VP} *t_j* [_{VP} *possa avere indovinato* [_{CP}(₂) [*a chi*]_k][_{VP}*t_i*¹ [_{VP}*t_k*¹ [_{VP}[_{VP} *affiderò t_i t_k*]]]]]]]]]]],...
- c. **chi_i* [_{VP}*t_i*²[_{VP}[_{VP}*ti domandi* [_{CP} *chi_j* [_{VP}*t_i*¹[_{VP}*t_j* [_{VP} *ha incontrato t_j*]]]]]]]] ?
- d. [*a quale dei tuoi figli*]_i non [_{VP}*t_i*²[_{VP}[_{VP}*ti ricordi* [_{CP}[*quanti soldi*]_j [_{VP}*t_i*¹[_{VP}*t_j*¹[_{VP}[_{VP}*hai dato t_j t_i*]]]]]]]]]] ?
- e. *chi_i* [_{VP}*t_i*¹[_{VP}[_{VP}*ti chiedi* [_{CP}[*che cosa*]_j [_{VP}*t_j*¹[_{VP}*t_i* [_{VP} *abbia dipinto t_j*]]]]]]]]]] ? ⁸⁾

(15a)において、項の原初痕跡 (*t_i*, *t_j*) は共に V (*avrebbero affidato*) によって θ 統率されると考えられる (ECP が満たされる)。 *che_i*, [*a chi*]_j の中間痕跡は、VP 付加された位置にあるため、embd. VP と matrix VP は s-bar. を形成しない。また、embd. CP は V (*sapevi*) によって L 標示されるため、同様に s-bar. を形成しない。結果として、(15a) は適切に文法的に予測されることになる。(15a) の文法性を説明する論法により、(15b) における *che_i* と [*a chi*]_k の移動は ECP と Subjacency の双方を満足する。定義 (12) により、主語の原初痕跡 (*t_i*) は V (*possa avere indovinato*) によって θ 統率される (ECP を満足する)。また、部分連鎖 (*chi_j*, *t_j*) の移動経路上には s-bar. が介在しない。結果として、Manzini (1988) の理論は (15b) を誤って文法的と予測することになる。また、同様の論法は (15c-e) をすべて文法的と予測する。明らかに、上の文法性判断の予測は事実と合わない。この予測上の不備はどのように打開されるであろうか。第3節において、この不備を打開すると考えられる説明原理が提案される。

3. 代替理論

本稿の註 (8) で指摘したように、(13a) は ECP によって排除される。一方、(13b-c) は Subjacency に抵触すると予測される。(13a-b) の文法性判断がすべて非文 (*) だとすると、問題が起こることになろう。(13a-c) が共に ECP に違反すると予測する理論の構築は不可能であろうか。この要請は、選言

的な ECP 定義 (11) を (16) のように連言的定義に修正することによって満たされるであろう (θ 統率の定義 (12) は、純粹に構造概念として解釈される⁹⁾).

(16) ECP

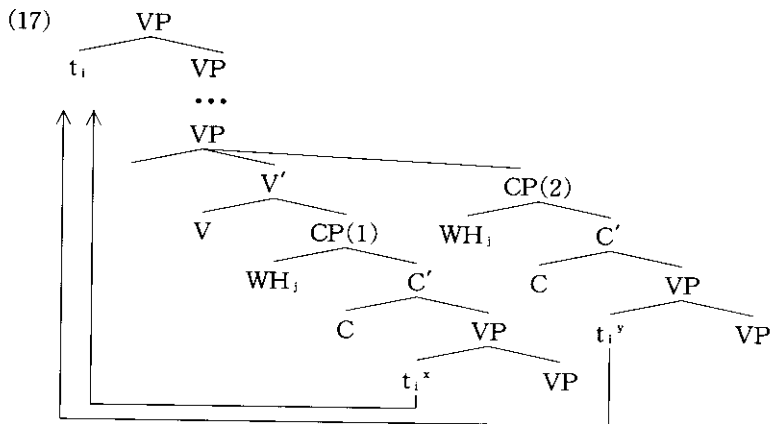
If α is a trace and β is the immediate antecedent of α in a chain,

- (i) the foot of the chain is θ -governed; and
- (ii) β governs α .

(16) の ECP は、項、非項の区別なく、原初痕跡が θ 統率され、同時にすべての部分連鎖において統率関係が成立することを要求する。

(13a) 中の原初痕跡 (t_i, t_j) は、共に V (*abbia scritto*) によって θ 統率される。部分連鎖 (t_j^1, t_j), ($[che\ cosa]_j, t_j^1$) では統率要件が満たされる。同様に、部分連鎖 (t_i, t_i^1), ($perché_i, t_i^2$) においても統率要件が満たされる。しかしながら、 t_i^1 は g 標示されないため、これを支配する最大範疇である *embd. CP* が $g\text{-bar.}$ を形成する。よって、部分連鎖 (t_i^1, t_i^2) は統率要件を満足しない ((13a) における移動はすべて Subjacency を満足する)。結果として、(13a) は適切に非文と予測されることになる。前述のように、(13b) は Subjacency に違反する。同時に、*embd. CP* は $g\text{-bar.}$ を形成する。(16) により、部分連鎖 (t_i^3, t_i^2) は統率要件を満足しない。結果として、(13b) は ECP にも抵触することになる。(13c) も同様に、部分連鎖 (chi_i, t_i^2) は統率要件を満たさない (文主語 CP が $g\text{-bar.}$ となる)。結果として、(13c) もまた、ECP と Subjacency の双方に抵触することになる。

しかしながら、(16) は問題を惹起する。例えば (17) のような移動は不可と予測される (ECP に違反する)。つまり、VP に付加した位置から当該 VP を直接支配する CP の SPEC (C) 位置を越える移動を排除する (当該 SPEC (C) 位置には他の WH 要素が生起する)。



CP₍₁₎ は V によって L 標示されるため、s-bar. とはならない。t_i^x は g 標示されないため、当該 t_i^x を支配する CP₍₁₎ は g-bar. を形成する。よって、部分連鎖 (t_i, t_i^x) は ECP に抵触することになる。同様に、CP₍₂₎ もまた、t_i^y にとっての g-bar. を形成する(同時に、s-bar. にもなる)。このように、ある WH 要素が VP に付加した位置から移動する場合、一般的に、(16)は、移動要素が当該 VP を支配する CP の SPEC (C) 位置に一時停止しない限り、この移動を阻止する。結果として、本稿の(1)の用例はすべて ECP に抵触し、非文と予測されることになる。

(16)に基づく上の予測は、明らかに事実と反する。この不備は、連続する VP 付加の回数を規制する何らかの仮説によって打開可能と考えられる。最初に、疑問詞 WH 要素の移動について検討する。

前述のように、(13)の用例はすべて ECP に抵触すると予測される。この予測は、問題を惹起しない。しかしながら、本稿の(1c-e)の相違を説明できないように思われる。

前述のように、(16)は(15d-e)を誤って非文と予測する(embd. CP が g-bar. となり、ECP に違反する)。(15d-e)における embd. CP の g-bar. 性を相殺するプロセスを想定することによって、当該用例の文法性が説明されることが考えられる。ここで、連続する VP 付加の回数を規制する(18)と VP 付加回数に関連する g-bar. の相殺条件(19)を設定する。

(18) Constraint on VP Adjunction Sequence (1)

疑問詞 WH 要素に関し、その基底生成された位置、あるいは置換移動した位置からの VP 付加移動は 1 回に限定される。但し、接続法節内にある VP への付加移動は 1 回と数えられない。

(19) Cancellation of CP's G-Barrierhood

項の WH 要素が移動する場合において、(18)の規制の範囲内にある最も高位の VP 付加構造は、それが支配する最初の CP の g-bar. 性を相殺する。

(18) の規制に基づく (1c-e) の移動経路は (20) となる。

- (20) c. * chi_i ti domandi [_{CP} chi_j [_{VP} t_i [_{VP} t_j [_{VP} ha incontrato t_i]]]]] ?
 d. [a quale dei tuoi figli]_i non ti ricordi [_{CP} [quanti soldi]_j [_{VP} t_i [_{VP} t_j [_{VP} hai dato t_j t_i]]]]]]] ?
 e. chi_i [_{VP} t_i [_{VP} [_{VP} ti chiedi [_{CP} [che cosa]_j [_{VP} t_i [_{VP} abbia dipinto t_j]]]]]]]]] ? ¹⁰⁾

(20c) において、 chi_i は既に embd. VP に付加している。(18) は matrix VP への連続付加を阻止する。また、(19) によって、embd. CP 中の VP 付加構造が相殺する g-bar. を形成する CP が存在しない (embd. CP は g-bar. となる)。また、 chi_i が matrix VP に付加できないため、当該 VP は s-bar. を形成することになる。結果として、(20c) は ECP と Subjacency の双方に抵触することになる。一方、(20e) の embd. V は接続法の形態で実現されている。つまり、当該 VP への付加は 1 回と数えられないため、長距離移動要素 chi_i は、matrix VP へ付加可能となる (matrix VP は s-bar. にならない)。(19) の条件によって、matrix VP の付加構造は、それが支配する最初の CP (embd. CP) の g-bar. 性を相殺する。結果として、(20e) は ECP と Subjacency の双方を満足する。

(20c) と (20e) を説明する論法は、(20d) を誤って非文と予測する。(18) によって、長距離移動要素の matrix VP への付加が阻止される。つまり、embd. CP が g-bar. となる。matrix VP は、同時に g-bar. と s-bar. を形成する。結果として、本稿の仮説群は (20d) が ECP と Subjacency の双方に

違反すると予測する。ここで、疑問詞 WH 要素 *quale* (*which*) の場合には、(18) の制限である 1 回が 2 回に変更されると考えてみよう。¹¹⁾ この変更の結果、長距離移動要素の matrix VP への付加が可能となる (当該 VP は s-bar. でなくなる)。また、本稿の (19) によって、embd. CP の g-bar. 性が相殺される。つまり、(20d) は適切に文法的と予測されることになる (詳細は後述する)。

上の (18-19) の仮説は、以下の (21a) の文法性をも適格に予測する ((21b) は移動経路を示す)。

- (21) a. chi_i ti chiedi $perché_j$ io consideri t_i intelligente t_j ?

‘who do you wonder why I consider intelligent’

[Manzini (1988) 40b]

- b. chi_i [$_{VP}t_i$ [$_{VP}pro$ [$_{VP}ti$ chiedi [$_{CP}perché_j$ [$_{VP}t_i$ [$_{VP}t_i$ [$_{VP}pro$ [$_{VP}$ [$_{V'}$ consideri [$_{AP}t_i$ [$_{AP}$ intelligente]]]] [t_j]]]]]]]] ?

perché_j の移動は、ECP と Subjacency の双方を満足する。AP に付加された位置で基底生成される小節の主語である *chi_i* は、embd. CP が接続法節であるため、embd. VP と matrix VP の双方に一時停止可能である。また、g-bar. 性相殺条件 (19) の適用によって、*chi_i* の移動経路上には如何なる s-bar., g-bar. も存在しない。結果として、(21) の文法性が適切に予測されることになる。

次に、関係詞 WH 要素の移動について検討する。最初に、(1a-b) の相違について考える (便宜上、(22) として再掲する)。

- (22) a. il solo incarico [$_{CP(1)}che_i$ non sapevi [$_{CP(2)}$ [a chi_j]_j avrebbero affidato t_i t_j]] è poi finito proprio a te.

- b. *questo incarico, [$_{CP(1)}che_i$ non so proprio [$_{CP(2)}$ chi_j t_j passa avere indovinato [$_{CP(3)}$ [a chi_k]_k affiderò t_i t_k]]],...

前述のように、(22a) では、移動要素 (*che_i*) が単一の境界節点 ($CP_{(2)}$) を越える。一方、(22b) 中の移動要素 (*che_i*) は複数の境界節点 ($CP_{(2)}$, $CP_{(3)}$) を越えることになる。つまり、(22) の相違は Rizzi (1982) の Subjacency 理論によって説明可能である。この Subjacency 理論による効果が、本稿の仮説群によっても期待されるであろうか。

(22a) の文法性が示すように、疑問詞 WH 要素に対して適用される仮説 (18) は修正の必要がある。そこで、関係詞 WH 要素に対して、以下の (23) を前提することにする ((19) の仮説は保持される)。

(23) Constraint on VP Adjunction Sequence (2)

関係詞 WH 要素に関し、その基底生成された位置、あるいは置換移動した位置からの VP 付加移動は、多くて 2 回までの連続に限定される。但し、接続法節内にある VP への付加移動は 1 回と数えられない。

(22a) の che_i は、 $CP_{(1)}$ 中の VP にも付加可能である。仮説 (19) の適用によって、 $CP_{(2)}$ の g-bar. 性が相殺される (ECP を満足する)。如何なる s-bar. も介在しないため、(22a) は適切に文法的と予測される。一方、(22b) の che_i は、(23)によって、 $CP_{(3)}$ と $CP_{(2)}$ 中の VP には付加移動可能であるが、 $CP_{(1)}$ へのそれは排除される。仮説 (19) の適用によって、 $CP_{(3)}$ の g-bar. 性が相殺される。しかしながら、 $CP_{(2)}$ の g-bar. 性は相殺されない。また、 $CP_{(1)}$ 中の VP の付加構造は、同時に g-bar. と s-bar. を形成する。結果として、本稿の仮説群は (22b) を非文と予測することになる (ECP と Subjacency の双方に抵触する)。次に、以下の (24) の用例を検討する。(24) では、疑問詞 WH 要素、あるいは関係詞 WH 要素が SPEC (C) 位置に一時停止可能な用例である。(24b) に対する移動経路は 2 通り考えられる (これを、(25b-c) に示す)。

- (24) a. il mio primo libro, che_i credo che tu sappia [a chi_j] ho dedicato $t_i t_j$,

'my first book, which I believe that you know to whom I dedicated,...' [Rizzi (1982) 18a]

- b. *il mio primo libro, che_i so [a chi_j] credi che abbia dedicato $t_i t_j$,...

'my first book, which I know to whom you believe that I dedicated,...' [Rizzi (1982) 18b]

- (25) a. ill mio primo libro, [$CP_{(1)}$ che_i [$VP t_i^4$ [VP [VP credo [$CP_{(2)}$ t_i^3 [$VP t_i^2$ [VP tu [VP sappia [$CP_{(3)}$ [a chi_j] [$VP t_j^1$ [$VP t_j^1$ [VP [VP ho dedicato $t_i t_j$]]]]]]]]]]],...

- b. **ill mio primo libro*, [_{CP(1)}che_i [_{VP}t_i⁴ [_{VP}[_{VP} so [_{CP(2)}[a chi]_j [_{VP}t_i³ [_{VP}t_j² [_{VP}[_{VP} credi [_{CP(3)}t_j² [_{VP}t_i¹ [_{VP}[_{VP} abbia dedicato t_i t_j]]]]]]]]]]]]]]],...
- c. **il mio primo libro*, [_{CP(1)}che_i [_{VP}t_i³ [_{VP}[_{VP} so [_{CP(2)}[a chi]_j [_{VP}t_i² [_{VP}t_j³ [_{VP}[_{VP} credi [_{CP(3)}t_j² [_{VP}t_i¹ [_{VP}[_{VP} abbia dedicato t_i t_j]]]]]]]]]]]]]]],...

(25a) において、両 WH 要素が基底生成される最も深く埋め込まれた CP₍₃₎ 中には直説法の動詞が生起する。疑問詞 WH 要素である [a chi]_j の VP 付加は 1 回に限定される。[a chi]_j は、VP (*ho dedicato*) への付加移動を経て最終着地点に移動する。この移動経路上には如何なる s-bar. も g-bar. も介在しない (ECP と Subjacency を満足する)。一方、関係詞 WH 要素である che_i は、本稿の (23) により、連続して 2 回の VP 付加が許容される。つまり、VP (*ho dedicato*) と VP (*sappia*) への連続 VP 付加が可能となる。本稿の仮説 (19) によって、CP₍₃₎ の g-bar. 性が相殺される。che_i は、VP (*sappia*) に付加された位置から CP₍₂₎ の SPEC (C) 位置へ置換移動し、更に VP (*credo*) 位置へ付加可能である。¹²⁾ つまり、che_i のすべての部分連鎖上には如何なる s-bar. も g-bar. も存在しない。結果として、本稿の仮説群は (25a) を適切に文法的と予測する。

(25b-c) はそれぞれ、che_i と [a chi]_j が CP₍₃₎ の SPEC (C) 位置に一時停止した場合である (その SPEC (C) 位置に一時停止した WH 要素に対して、当該 CP は g-bar., s-bar. を形成しない)。(25b) において、CP₍₃₎ の SPEC (C) 位置に一時停止した関係詞 WH 要素 (che_i) が、同様に関係詞 WH 要素として振る舞うと考えてみよう。その場合、当該 SPEC (C) 位置から VP への付加連続が 2 回まで許容される。つまり、VP (*credi, so*) への連続付加が可能となる。その結果として、仮説 (19) は CP₍₂₎ の g-bar. 性を相殺する。つまり、che_i の移動は ECP と Subjacency の双方を満足する。CP₍₃₎ 中に接続法の動詞が生起するため、疑問詞 WH 要素は VP (*abbia dedicato, credi*) に連続的に付加可能である。仮説 (19) により、CP₍₃₎ の g-bar. 性が相殺される。結果として、[a chi]_j の移動も ECP と Subjacency を満足する。つまり、本稿の仮説群は、誤って (25b) を文法的と予測することになる。(25c) は、問題を惹起しない。SPEC (C) 位置に一時停止する [a chi]_j の移動は、ECP と Subjacency を満たす。CP₍₃₎ 中の動詞が接続法であるため、che_i は VP (*abbia*

dedicato, credi, so) に連続的に付加移動可能である。仮説 (19) は $CP_{(2)}$ の $g\text{-bar}$. 性を相殺するが, $CP_{(3)}$ は依然として $g\text{-bar}$. を形成する。つまり, (25c) は部分連鎖 (t_i^2, t_i^1) が ECP に抵触することによって, 非文と予測される。それでは, (25b) で観察された予測上の不備はどのようにして打開されるであろうか。

(25b) の移動経路を排除することはできないであろう。SPEC (C) 位置に一時停止した関係詞 WH 要素が疑問詞 WH 要素として振る舞うと考えてみよう。その場合, $CP_{(3)}$ の SPEC (C) 位置に一時停止した che_i は, VP (*credi*) へは付加可能であるが, 更に VP (*so*) に連続して付加することはできない。つまり, 当該要素は $CP_{(3)}$ の VP (*credi*) に付加した位置から最終着地点へ一挙に移動することになる。結果として, $CP_{(2)}$ が $g\text{-bar}$. を形成し, *so* が生起する VP の付加構造が $s\text{-bar}$. となる。つまり, この前提によって, (25b) は非文と予測されることになる (ECP と Subjacency の双方に抵触する)。本稿では, SPEC (C) 位置に一時停止した関係詞 WH 要素が疑問詞 WH 要素の挙動を示すと前提する。

しかしながら, 本稿の仮説群は以下の用例を等しく文法的と予測する。

- (26) a. la macchina che_i [$_{VP}t_i^4$ [$_{VP}$ [$_{VP}$ *credo* [$_{CP(1)}t_i^3$ che [$_{VP}t_i^2$ [$_{VP}$ *Mario* [$_{VP}$ *si domandi* [$_{CP(2)}se$ [$_{VP}t_i^1$ [$_{VP}$ [$_{VP}$ *potrà utilizzare* t_i nel week end]]]]]]]]]]]]]] è la mia.¹³⁾

'the car that I believe that Mario wonders whether he will be allowed to use during the week end is mine'

[Rizzi (1982) 19a]

- b. *la macchina che_i [$_{VP}t_i^4$ [$_{VP}$ [$_{VP}$ *mi domando* [$_{CP(1)}se$ [$_{VP}t_i^3$ [$_{VP}$ *Mario* [$_{VP}$ *creda* [$_{CP(2)}t_i^2$ che [$_{VP}t_i^1$ [$_{VP}$ [$_{VP}$ *potrà utilizzare* t_i nel week end]]]]]]]]]]]]]] è la mia.

'the car that I wonder whether Mario believes that he will be allowed to use during the week end is mine'

[Rizzi (1982) 19b]

(26a) において, che_i は VP (*potrà utilizzare, si domandi*) へ連続して付加可能である。仮説 (19) によって, $CP_{(2)}$ の $g\text{-bar}$. 性が相殺される。その後の移動もまた, ECP を満足する (全移動経路上に $s\text{-bar}$. は介在しない)。よっ

て、(26a) は適切に文法的と予測される。(26b) において、 $CP_{(2)}$ の SPEC (C) 位置に移動した要素は疑問詞 WH 要素として振る舞う。 $CP_{(2)}$ を支配する VP 中に接続法の動詞 (*creda*) が生起するため、当該 SPEC (C) 位置にある要素は VP (*creda, mi domando*) に連続的に付加可能となる。この場合、仮説 (19) は、 $CP_{(1)}$ の g-bar. 性を相殺する (全移動経路上に s-bar. は介在しない)。結果として、本稿の仮説群は (26b) を誤って文法的と予測することになる。この予測上の不備は、WH 要素が基底生成された位置から接続法動詞を含む VP に付加する場合に限り、その付加回数が数えられないと考えることにより打開される。つまり、本稿の仮説群 (18, 23) は以下のように書き換えられることになる (仮説 (19) は、そのままの形で保持されるが、便宜上 (28) として再掲する)。

(27) Constraint on VP Adjunction Sequence

- (a) 疑問詞 WH 要素に関し、その基底生成された位置、あるいは置換移動した位置からの VP 付加移動は 1 回に限定される。
- (b) 関係詞 WH 要素に関し、その基底生成された位置からの VP 付加移動は、多くて 2 回までの連続に限定される。
- (c) SPEC (C) を経由した関係詞 WH 要素は、疑問詞 WH 要素として振る舞う。
- (d) (a-c) において、WH 要素が基底生成された位置から接続法動詞が生起する VP への付加回数は数えられない。

(28) Cancellation of CP's G-Barrierhood

項の WH 要素が移動する場合において、(27) の規制の範囲内にある最も高位の VP 付加構造は、それが支配する最初の CP の g-bar. 性を相殺する。

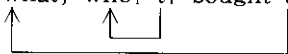
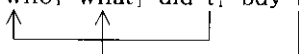
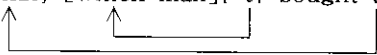
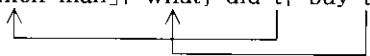
ここで、*quale* を含む疑問詞 WH 要素が長距離移動する本稿の (1d) の用例に立ち戻る。

- (29) $[a \text{ quale dei tuoi figli}]_i \text{ non } [{}_{VP} t_i^2 [{}_{VP} [{}_{VP} t_i \text{ ricordi } [{}_{CP} [{}_{\text{quanti soldi}}]_j [{}_{VP} t_i^1 [{}_{VP} t_j^1 [{}_{VP} [{}_{VP} \text{ hai dato } t_j \text{ } t_i]]]]]]]] ?$

前述のように、この疑問詞 WH 要素である [*a quale dei tuoi figli*]_i が (27 b) の条件に従うと前提すると、(29) の文法性は説明されない (matrix VP (*ti ricordi*) への付加が許容されない). embd. CP が g-bar_i を形成するため、誤って非文と予測される (ECP に違反する). *quale* を含む疑問詞 WH 要素が関係詞 WH 要素として振る舞うと前提すると、(29) の文法性は説明可能である。¹⁴⁾ しかしながら、この前提は *ad hoc* な感を免れないであろう。この前提の効果は、他の論法から導き出されないであろうか。

単純 WH 要素と *which* で導入される複合 WH 要素 (*which N'*) が異なる挙動を示す事例が報告されている。¹⁵⁾ 例として、LF における英語の WH 移動で観察される優位性効果 (Superiority Effect) について概観する ((31) は、(30) のそれぞれの LF 表示)。

- (30) a. $\text{who}_i \text{ } t_i \text{ bought what}_j \text{ ?}$
 b. $*\text{what}_j \text{ did who}_i \text{ buy } t_j \text{ ?}$
 c. $[\text{which man}]_i \text{ } t_i \text{ bought what}_j \text{ ?}$
 d. $\text{what}_j \text{ did } [\text{which man}]_i \text{ buy } t_j \text{ ?}$

- (31) a. $\text{what}_j \text{ who}_i \text{ } t_i \text{ bought } t_j$

 b. $*\text{who}_i \text{ what}_j \text{ did } t_i \text{ buy } t_j$

 c. $\text{what}_j \text{ } [\text{which man}]_i \text{ } t_i \text{ bought } t_j$

 d. $[\text{which man}]_i \text{ what}_j \text{ did } t_i \text{ buy } t_j$


Pesetsky (1987) は、(30b) の非文性を Nested Dependency Condition で説明する。¹⁶⁾ しかしながら、(30b) の非文性を説明するこの条件は、(30d) の文法性を説明しない ((30d) の依存関係 (移動経路) の一方は他方を包含していない)。Pesetsky (1987) は、数量詞 (quantifier) が LF 移動において Comp 位置に付加移動すると考える。そこで、彼は *which N'* のタイプの WH 要素

は数量詞でないと前提する(その結果、当該タイプの WH 要素は LF 移動しないことになる)。当該タイプの WH 要素を Discourse-Linked WH 要素(D-Linked WH)と規定する。結果として、(30d)においては単一の依存関係(移動)が認められ、上の Nested Dependency Condition に抵触しないことになる。D-Linked WH (*which N'*)が数量詞として機能する、つまり、当該 WH 要素も LF 移動する)という前提の下での立論も可能であろう。この場合、D-Linked WH 要素が他の WH 要素と異なる移動経路をたどると考えなければならない(この立場からの考察に関しては、石岡(1991a, b)を参照されたい)。¹⁷⁾

S 移動においても、D-Linked WH 要素の特殊性が観察されるであろう。ここで、Cinque(1990)と同様に、英語の *which N'* タイプに対応する疑問詞 WH 表現と関係詞 WH 表現が共に D-Linked WH を構成すると考えることにする。つまり、本稿においてこれまで設定された疑問詞 WH 対関係詞 WH の対比は、非 D-Linked WH 対 D-Linked WH のそれに言い換えられることになる。結果として、本稿の(27)は(32)の形で一般化されることになる。

(32) Constraint on VP Adjunction Sequence

- (a) 非 D-Linked WH 要素に関し、その基底生成された位置、あるいは置換移動した位置からの VP 付加移動は 1 回に限定される。
- (b) D-Linked WH 要素に関し、その基底生成された位置からの VP 付加移動は、多くて 2 回までの連続に限定される。
- (c) SPEC (C) 位置を経由した D-Linked WH 要素は、非 D-Linked WH 要素として振る舞う。
- (d) (a-c)において、WH 要素が基底生成された位置から接続法動詞が生起する VP への付加回数は数えられない。

4. 結 語

以上において、Manzini(1988)の ECP を部分的に修正した定義体系に立脚し、仮説(19)、(32)が設定された。本稿では、名詞句内からの WH 要素移動は取り扱われなかった。言うまでもなく、このタイプの WH 移動の事例を吟味した上で仮説(19)、(32)の修正が必要であろう。¹⁸⁾

最後に、Manzini (1988) の挙げる用例中、文法性判断が異なる英語 — イタリア語例について、更に、本稿の仮説群にとって問題となるような用例について検討を加える。¹⁹⁾

- (33) a. *who_i do you believe t_i is a painter?*
 b. **who_i do [_{IP} t_i⁴ [_{IP} you [_{VP} t_i³ [_{VP} believe [_{CP} t_i² [_{C'} that [_{IP} t_i¹ [_{VP} t_i [_{VP} is a painter]]]]]]]]]]]] ?*²⁰⁾
 c. *chi_i [_{VP} t_i² [_{VP} credi [_{CP} t_i¹ [_{C'} che [_{VP} t_i [_{VP} sia un pittore]]]]]]]] ?* [Manzini (1988) 39]

chi_i の移動経路上には、如何なる s-bar. も g-bar. も介在しない。よって、本稿の仮説群は (33c) を適切に文法的と予測する。(33a) は、**[that-t]* Effect の事例である。C に関する語彙的実現の如何を問わず、C がその sister である CP を g 標示すると考えてみよう。g-bar. の定義に関する規定 ((8ii), (8i)) によって、embd. IP は g-bar. を形成しない。同様の論法によって、embd. CP もまた g-bar. とならない。また、*who_i* の原初痕跡 (*t_i*) は *V (is)* によって θ 統率される。当該 *t_i* は、その直接の先行詞 *t_i¹* によって統率される。その他の部分連鎖もまた、ECP を満足する。つまり、(33b) を ECP によって排除することは不可能である。embd. IP が C によって L 標示されないため、s-bar. を形成する。結果として、(33b) は Subjacency によって非文と予測されることになる。Subjacency に関する違反が、ECP のそれよりも軽微な違反だと前提すると問題が起こるのであろう ((33b) の文法性判断 (*) は、ECP に関する違反を予想させる)。

(33a) が示すように、(33b) 中の C (*that*) はその生起が随意的である。ここで、その生起が随意的である C (*that*) は、C の位置に基底生成されるのではなく、 $[\pm \gamma]$ 標示が為される段階以前の S 構造の段階で C 位置に付加されると前提してみよう。²¹⁾ 更に、付加構造を形成する C が g 標示要素として機能しないと考えてみよう。これらの前提によって、embd. IP は g 標示されないことになる。結果、当該 IP と同一指標を有する *t_i¹* もまた g 標示されないことになる。つまり、当該 embd. IP が g-bar. を形成する。部分連鎖 (*t_i¹*, *t_i²*) が ECP に違反する。結果として、(33b) は ECP と Subjacency の双方に違反することになる。²²⁾ この説明法が妥当するならば、イタリア語と異なり、英語では VP (IP) 付加の連続に関する規制が発動しないことになろう。

次に、以下の (34) を検討する。

- (34) a. *who_i do [_{IP}t_i⁴[_{IP}you [_{VP}t_i³[_{VP}[_{VP}wonder [_{CP} why_j[_{IP}t_j²[_{IP}t_j²[_{IP}
I [_{VP}t_i¹[_{VP}t_j¹[_{VP}[_{VP}[V' consider [_{AP}t_i[_{AP}intelligent]]]
t_j]]]]]]]]]]]] ?

- b. chi_i ti chiedi perché_j io consideri t_i intelligente t_j ?

[Manzini (1988) 40]

(34b) は既に検討したように、ECP と Subjacency の双方を満足する。(34a)において、原初痕跡 (t_i , t_j) はそれぞれ V, A によって θ 統率される。why_jの移動は embd. VP と embd. IP に連続的に付加可能であるため、ECP と Subjacency の要請を満たす。同様に、部分連鎖 (t_i , t_i^1), (t_i^2 , t_i^1), (t_i^4 , t_i^3) と (who_i , t_i^4) もまた、両条件を満足する。 t_i^2 は g 標示されない。よって、この t_i^2 を支配する最大投射 (CP) が g-bar. を形成する (当該 CP は s-bar. とならない)。結果として、部分連鎖 (t_i^3 , t_i^2) が ECP に抵触し、(34a) は非文と予測されることになる。同様に、以下の (35a) もまた、非文と予測される。

- (35) a. *who_i do [_{IP}t_i³[_{IP}you [_{VP}t_i²[_{VP}[_{VP}wonder [_{CP}what_i[_{IP}t_i²[_{IP}t_i¹
[_{VP}t_j¹[_{VP}t_i[_{VP} panted t_j]]]]]]]]]]]] ?

- b. chi_i ti chiedi [che cosa]_j t_i abbia dipinto ?

[Manzini (1988) 34]

(35b) についての検討は省略する。原初痕跡 (t_i , t_j) は lexical X⁰ 要素によって θ 統率される。しかし、 t_i^1 にとって embd. IP が s-bar. となり、embd. CP が g-bar. となる。部分連鎖 (t_i^2 , t_i^1) が Subjacency と ECP の双方に抵触するため、(35a) は非文と予測されることになる。²³⁾

最後に、イタリア語に対する本稿の仮説群にとって問題となるような用例 (36) について考える。

- (36) a. ? [che studente]_i non [_{VP}t_i¹[_{VP}[_{VP} sai [_{CP}come_j[_{VP}t_j¹[_{VP}t_i[_{VP}
potrà risolvere il problema t_j]]]]]]]] ? [Rizzi (1982) 73]
'which student don't you know how could solve the problem'

- b. ? [che problema]_i non [_{VP}t_i²[_{VP}[_{VP} sai [_{CP}come_j [_{VP}t_j¹[_{VP}t_i¹[_{VP}potremo risolvere t_i t_j]]]]]]]] ? [Rizzi (1982) 73]
 'which problem don't you know how we could solve'
- c. *come_j non [_{VP}[_{VP} sai [_{CP}[che problema]_i [_{VP}t_j¹[_{VP}t_i¹[_{VP}potremo risolvere t_i t_j]]]]]]]] ? [Rizzi (1982) 73]
 'how don't you know which problem we could solve'
- d. ? ? chi_i non [_{VP}t_i¹[_{VP}[_{VP} sai [_{CP}[che cosa]_j [_{VP}t_j¹[_{VP}t_i¹[_{VP}ha fatto t_j]]]]]]]] ? [Rizzi (1982) 7b]
 'who don't you know what did'
- e. ? ? [a chi]_i non [_{VP}[_{VP} sai [_{CP}[che cosa]_j [_{VP}t_j¹[_{VP}t_i¹[_{VP}hai detto t_j t_i]]]]]]]] ? [Rizzi (1982) 7c]
 'to whom don't you know what I said'
- f. ? ? [a chi]_i non [_{VP}[_{VP}t_i ricordi [_{CP}[quanti soldi]_j [_{VP}t_j¹[_{VP}t_i¹[_{VP}hai dato t_j t_i]]]]]]]] ? [Rizzi (1982) 註 5 (ia)]
 'to whom do you remember how much money you gave'

(36c) は、適切に排除される。長距離移動する *come_j* が非 D-Linked WH 要素であり、非項であるため、embd. CP が \bar{g} -bar. を形成し、matrix VP 全体が \bar{s} -bar. となる。よって、(36c) は ECP と Subjacency の双方に抵触することになる。(36a-b) における [*che studente*]_j, [*che problema*]_j が D-Linked WH 要素として機能すると考えると (VP 付加の連続が 2 回まで許容されると考えると)、本稿の仮説群は当該 (36a-b) を文法的と予測する (ECP と Subjacency の双方を満足する)。*chi*, [*a chi*] が非 D-Linked WH 要素として機能すると前提すると、(36d) と (36e-f) はそれぞれ文法的、非文と予測される。つまり、本稿の仮説群の予測と実際の文法性判断の間に異同が観察される。これは、本稿で設定された仮説群を更に検討し修正する必要性を物語るものである。この予測上の不備は、如何にして打開されるであろうか。以下で、それに関する初歩的な論考を試みる。

Rizzi (1982: 51, 70) は、イタリア語において、疑問詞 WH 要素を越える疑問詞 WH 要素の長距離移動の用例が非文 (*) から不自然 (??) の幅で変動するが、長距離移動する WH 要素が比較的「重い」(heavier) 場合には、当該移動の用例が改善されると指摘する (改善の例として、本稿の (1d) を挙げる)。前述のように、本稿の仮説群は、(1d) において長距離移動する要素([*a*

quale...] が比較的「重い」という前提に立って当該用例の文法性を説明するものでない。この文法性は、*quale* の持つ D-Linked WH 要素としての機能に還元された。以下に、(36a-b, 36d-f) の文法性判断を統一的に説明すると思われる仮説を設定する（この場合も、註 (18) の共鳴構造に言及する）。

- (37) a. 非 D-Linked WH 要素の（中間）痕跡に対して、否定辞 *non* は s-bar. として機能する。²⁴⁾
- b. 構造上同位の位置に基底生成される WH 要素（例えば、直接目的語 WH と間接目的語 WH）の中で、長距離移動する要素は D-Linked WH としても機能する（→共鳴構造）。
- c. *che cosa* (*what*) を除き、一般的に *che N'* は D-Linked WH 要素として機能するが、非 D-Linked WH 要素としての解釈も許容される（→共鳴構造）。²⁵⁾

(37c) によって、 $[che\ studente]_i$ は非 D-Linked WH 要素としても機能する。その場合、matrix VP への付加移動は許容されない。結果として、embd. CP が g-bar. となり、matrix VP と *non* が s-bar. を形成することになり、当該文は非文と予測される。一方、 $[che\ studente]_i$ が D-Linked WH 要素の挙動を示す場合には、当該文は文法的と予測される。共鳴構造の考え方により、(36a) は (?) あるいは (??) と予測されることになる（(36b) も同様）。前述のように、(37) を除く本稿の仮説群は (36d-f) を非文と予測する。(37b) により、長距離移動する WH 要素 (chi_i , $[a\ chi]_i$) は D-Linked WH 要素としても機能する。この場合、matrix VP への付加移動が可能となり、matrix VP と embd. CP は bar. を形成しない。つまり、当該文は文法的と予測される（この場合には、*non* が s-bar. とならない）。共鳴構造により、(36d-f) は (?) あるいは (??) と予測されることになる。

註

- 1) 石岡 (1990a) を参照されたい。
- 2) TP の位置、そしてその構造は本稿での提案（詳細は、稿を改める）。
- 3) Agreement とは、XP とその主要部 X、更に XP とその指定部 (SPEC (X)) の関係を指す。また、移動する WH 要素が非項である最大投射に付加する形で一時停止すると前提されている。
- 4) 後述するように、本稿では ECP の (i) と (ii) を連言的に定義する。θ 統率された原

初痕跡は、ECP の (i) を満たす。一方、 θ 統率されない原初痕跡の場合は、ECP の定義 (ii) のより、その先行詞によって統率されなければならない。しかし、この場合、Subjacency に関する規制と ECP の (ii) に関するそれは overlap する。結果として、Subjacency は θ 統率される要素に対してのみ必要となる。この θ 統率された要素に対する Subjacency を ECP の中に組み込むことによる ECP の一元化については、Manzini (1988: 175-182) を参照されたい。

- 5) (4-12) の定義体系では、Chomsky (1986b) で観察される IP の特殊性、bar. の受け継ぎを前提する必要がある。統率の場合同様、移動の場合でも、単一の bar. が移動を阻止する。本稿では、この θ 統率を純粹に構造的概念として捉える。
この (12) の定義により、主語痕跡が V によって θ 統率されることになる。
- 6) 後述するように、本稿第 3 節では t_i が V (*abbia scritto*) によって θ 統率されるとして論を進める。
- 7) Subjacency に関する違反が、ECP のそれよりも軽度の違反を引き起こすと前提すると、問題を提起することになる。この場合、(14b-c) の文法性判断は (??) と予測されることになろう。
- 8) 本稿では、VP 全体に支配された要素が当該 VP に付加可能と前提する。よって、VP 投射の分枝に支配された主語等は、当該 VP に付加しない。
- 9) この前提によって、(13a) 中の非項 (*perché_i*) の原初痕跡 (t_i) は V (*abbia scritto*) に θ 統率されることになる。
(16i) の要件は、付加語の WH 移動を考慮すると、Rizzi (1990)、あるいは Jaeggli (1988) の Head Government、より具体的には語彙的要素による Head Government で置き換えた方がより妥当と思われる。これに関しては、稿を改めて検討する。
- 10) 本稿の g-bar 相殺条件 (19) は、項の WH 要素に対する条件である。よって、(13a) のような非項が長距離移動する場合には (19) が発動しない (emdbd. CP が g-bar. となる)。
- 11) この *quale* の特殊性については後述する。
- 12) VP (*ho dedicato, sappia*) に付加移動した後に CP₍₂₎ の SPEC (C) 位置に置換移動するため、更に VP (*credo*) に付加移動したとしても、これは本稿の (23) に違反しない。
- 13) *se (whether)* は C 位置に生起すると考える。また、WH 要素は、主要部が *se* である最大範疇 (CP) の SPEC (C) 位置に一時停止不可と前提する。
- 14) 本稿では、*quale* が代名詞的に用いられている場合には、その直後の空の N' があると考え (quale の用法を形容詞的なそれに一元化する)。つまり、*quale (N')* は英語の *which N'* と同列に取り扱われる。本稿では *che cosa (what)* 以外の *che N'* もまた、原則的に *which N'* と同じ扱いを受ける。
- 15) LF 統語移動 (S 移動) における *which N'* の特殊性に関しては、それぞれ Pesetsky (1987)、Grimshaw (1986) を参照されたい。
- 16) Nested Dependency Condition:
If two wh-trace dependencies overlap, one must contain the other.
- 17) 石岡 (1991a, b) では、他の名詞的単純 WH 要素と異なり D-Linked WH 要素が、DP を構成すると考える。つまり、他の WH 要素は NP として機能し、その構造も NP のそれであるが、D-Linked WH 要素は NP として機能するが、その構造は DP であると前提する (NP は D の sister を構成する)。具体的には、D-Linked WH 要素がこの SPEC (D) 位置に一時停止すると考える。
- 18) Rizzi (1982) は、以下の (i) に示されるように、直接・間接目的語の場合よりも主語である関係詞 WH 要素の抽出移動が容易だと指摘する。

- (i) ?questo incarico, che_i non [_{VP} t_i² [_{VP} proprio [_{CP}(_i) chi_j [_{VP} t_j¹ [_{VP} t_j [_{VP} *possa* avere indovinato [_{CP}(_i) [a chi]_k [_{VP} t_k [_{VP} t_k [_{VP} è stato affidato t_k]]]]]]]]]]],...
'this task, that I really don't know who might have guessed to whom has been entrusted,...'

本稿の仮説群は CP(_i) の g-bar. 性を相殺するが、CP(_i) は依然として g-bar. を形成する。よって、(i) は非文と予測される (ECP に違反する)。(i) は、Rizzi (1982) の Subjacency 理論によっても非文と予測される。Rizzi (1982) と同様に、再述代名詞による関係節形成によって、この問題は解決可能であろう。周知のように、再述代名詞 (resumptive pronoun) による関係節形成は移動によるものでない。よって、ECP と Subjacency の規制を受けない。また、イタリア語は *pro* 落とし言語に属する。よって、主語 (再述) 代名詞は脱落可能である。つまり、(i) で観察される関係節形成は、移動によるそれか、再述代名詞によるそれが、見かけ上識別できない。結果として、(i) に対しては2つの派生構造が考えられる。移動による関係節形成の場合は非文(*)と予測され、再述代名詞による場合は文法的と予測されることになる。このように、2つの可能な派生構造それぞれの文法性判断が干渉し合って(?)が生み出されると考えられる(本稿では、これを共鳴構造と呼ぶ)。

- 19) 英語に対する本稿の仮説群の適用とその修正に関する詳細は、稿を改めて検討する。
20) IP にも付加移動可能である点に留意されたい。VP に付加された位置に基底生成される主語 (VP 主語) は、当該主語を直接支配する IP の SPEC 位置に置換移動すると考える (IP には付加しないと考え)。また、当該 SPEC (I) に置換移動した VP 主語は、その位置から当該 IP に付加移動することはないと考える (VP 主語が基底生成される CP 外にある IP には付加移動可能)。後述する (34a) の事例が示すように、小節の主語 (この場合は AP 主語) は、それが基底生成される CP 中にある IP に付加移動可能である。
21) 同様の論法が、Tiedeman (1989) にみられる。本稿における ECP は LF における [±γ] 標示のチェックとして把握される (cf. Aoun (1986))。
22) この論法は、その生起が義務的である C (*that*) の SPEC (C) 位置に WH 要素が一時的に停止しないと前提する必要性を生む。これに関する考察は、稿を改める。
23) 本稿の仮説群は、Chomsky (1986b: 36-37) が指摘する相違を説明できないように思われる。

- (i) a. what_i did you wonder [to whom]_j John gave t_i t_j?
b. what_i did you wonder [to whom]_j to give t_i t_j?

Chomsky (1986b) は、多くの話者にとって、(ib) の認容度が (ia) のそれよりも高いと指摘する。この相違は、Chomsky (1986b) で設定される bar. の定義体系で説明不可能である。そのために、当該定義体系から逸脱した特別の bar. を想定する。つまり、最も深く埋め込まれた [+Tense] CP 中の IP が bar. を形成すると考える。本稿の仮説群によれば (具体的には本稿の (4-10), (12), (16)), (ia-b) の双方において、embd. CP が g-bar. となるため、ECP によって排除される。つまり、双方とも同程度に非文と予測される。詳細に渡る検討が必要であるが、本稿では次のように考える。

項の (中間) 痕跡に関し、本稿の (8-9) によって g-bar. と規定される CP は、[+Tense] CP の場合は正に本来の g-bar. として機能するが、[-Tense] CP の場合は s-bar. として振る舞う (この場合、s-bar. の定義体系を修正する必要があるが)。この前提に従うと、(ia) は ECP によって、(ib) は Subjacency によって排除されることになる。

- 24) Rizzi (1990) の Relativized Minimality との関係をもっと検討する必要がある。

- 25) *che studente* (*which student*) が D-Linked WH 要素であり, *che studente* (*what student*) が非 D-Linked WH 要素と考える.

参考文献

- Aoun, J. (1986) *Generalized Binding. The Syntax and Logical Form of Wh-Interrogatives*. Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986a) *Knowledge of Language: Its Nature, Origins, and Use*. Praeger, New York.
- Chomsky, N. (1986b) *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Cinque, G. (1990) *Types of \bar{A} -Dependencies*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Grimshaw, J. (1986) "Subjacency and the S/S' Parameter." *Linguistic Inquiry* 17, 364-369.
- 石岡精三 (1990a) 「VP 付加の代替操作について」 長岡技術科学大学 『言語・人文科学論集 4』, 37-78.
- 石岡精三 (1991a) 「BC 性の受け継ぎについて」 西日本言語学会機関誌『ニダバ 20』, 19-28.
- 石岡精三 (1991b) 「LF 移動における Absorption と移動経路理論について」 長岡技術科学大学 『言語・人文科学論集 5』.
- Jaeggli, O. S. (1988) "ECP Effects at LF in Spanish." in David Birdsong and Jean-Pierre Montreuil (eds) *Advances in Romance Linguistics*. Foris, Dordrecht.
- Manzini, M. R. (1988) "Constituent Structure and Locality." in A. Cardinaletti, G. Cinque and G. Giusti (eds.) *Constituent Structure*. Foris, Dordrecht.
- Pesetsky, D. (1987) "Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding." in Eric J. Reuland and Alice G. B. ter Meulen (eds) *The Representation of (In) definiteness*. MIT press, Cambridge, Massachusetts.
- Rizzi, L. (1982) *Issues in Italian Syntax (chapter II)*. Foris, Dordrecht.
- Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*. MIT press, Cambridge, Massachusetts.
- Tiedeman, R. C. (1989) *Government and Locality Conditions on Syntactic Relations*. Doctoral dissertation, The University of Connecticut.